

論 文

日本昔話を心理臨床に用いるために —『日本昔話大成』の体系的理解と定義をめぐる試論—

芝 田 和 果

1. はじめに

心の様相を理解しようとする試みにおいて、臨床心理学、特に分析心理学の領域では昔話の視点をを用いることがある。その理論的根拠は分析心理学の創始者 C.G. ユング (1875-1961) が提唱した普遍的無意識仮説にあるが、実際に心理臨床の事例を検討する場面などでクライアントの心のありようや現象が昔話になぞらえて説明されると、それまでぼんやりとしか見えていなかったものが急に生き生きと見えだし、腑に落ちるといった経験は別段珍しいことではない。おそらくそれは私たちの心の奥深くに響くような体験的理解が昔話によってもたらされたからと思われる。この「心の奥深く」が、幼い時の記憶といった個人的無意識にあるのか、この風土に生まれ育った者が共感するような文化的な集合的無意識にあるのか、あるいは人類が共有するとされる普遍的無意識にあるのかは不明であるが、いずれにしても「心の奥深く」のどこかの層において、昔話は私たちを言葉以前の体験につなぐような力を備えている。また同時に、昔話は行動や意識といった具体的なレベルにおいても心理臨床に役立ちそうなヒントを与えるツールとなる可能性がある。なぜなら、昔話には生活で生じた事件や葛藤状況が描かれているが、生活者たちがこれとどのように向き合い、対処していったのかという視点で昔話を読むことによって、心理臨床における援助のヒ

ントを得ることができるかもしれないからである。このような仮説をもとに筆者は日本の昔話を日本の心理臨床のツールに用いるための研究を行っているが、その研究の基礎部分となる「昔話とは何か」についてまとめたものが本稿である。

心の奥深くにある昔話を心性理解のツールとして用いるにあたっては、まずは昔話の概念の定義と範囲とを明らかにしておくことが必要となる。昔話は歴史学、文学、社会学、言語学、文化人類学など多岐にわたる学問領域で研究されているが、昔話を実際に採集し、それを科学的に研究してきた民俗学において昔話がどのように定義され、体系づけられているのかをまとめることにした。昔話が私たちの心の奥深くで響くのも昔話と心がどこか未分化な関係にあるゆえかもしれないが、心理臨床のツールとしての利用可能性を考えた時、昔話というものを学問的に体系づけてきた学問領域において、昔話がどのように定義づけられているのかを理解しておくことは重要と思われるからである。

2. 方法

昔話の研究史を概観すると、「昔話とは何か」という問いに対してこれまでになされてきた様々なアプローチを垣間見ることができる。昔話が単に集められていた時代があり、そこから昔話の「型」という概念的な構成単位を軸に分

類しようとする動きが19世紀後半から20世紀初頭にかけてイギリス¹⁾やフィンランドで生まれた。そこから、型よりもさらに小さなモチーフ、トーク、エレメントといった構成単位から昔話を捉えようとする方向性や、要素でなく構造全体を見ようとする形態学的研究も生まれた。また、昔話がいつどこで発生したのかといった起源を問題にするアプローチ、それに関連してどの昔話がより古いのかを探ろうとするアプローチ、類似の昔話が異なる地域で発見された場合に問題となる伝播に関するアプローチ、昔話にはどのような目的や役割があったのかという機能を問題にするアプローチなど、様々な方面からの研究が生まれ、それぞれに発展していった。その中でも、定義の問題は各方面に広がるアプローチの根幹を担うものであるが、同時に定義の問題に取り組むこと自体が「昔話とは何か」の問題に直結する研究アプローチといえる。本稿の「3. 散文伝承群の総称語とその概念範囲」では昔話、及びその周辺概念がどのように定義されているのか、その概念範囲とともに見ていくことにする。「4. 『日本昔話大成』に収録された昔話」では、『日本昔話大成』（以下『大成』と記す）に収録された説話群の概要や整理のされ方を確認することで、昔話として収集された説話群とはどのようなものなのか、その大枠を掴むことを目指す。厳密にいうと、『大成』は日本の昔話世界を象徴的に表すものというよりも、『大成』を編んだ関敬吾（1899-1990）が日本の昔話をどのように定義し、各下位概念群を捉えているかに基づいて体系づけられたものである。それゆえ、各概念群の定義や範囲については関の考えと一貫している必要があるため、定義の記述においては『関敬吾著作集』（全9巻）第1巻（1980）～第6巻（1982）を底本にした。

筆者が日本の昔話世界を把握するために『大

成』を選んだ理由は、サイズのな丁度良さもあるが、それ以上に関が昔話の研究方法について多くの論考を書き残しているからである。昔話研究においては研究者の立場によって分類方法が異なり、それに伴って各概念範囲が学者ごとに異なることがある。欧米の昔話研究は日本よりも100年ほど先行しているといわれている²⁾が、日本における昔話研究の深化のために、すでに欧米の研究者間で林立していた散文伝承周辺の定義や分類、そしてその背景理論を日本に詳しく紹介してきたのが関敬吾であった。柳田國男（1875-1962）も日本民俗学における昔話研究の確立にあたってはヨーロッパのそれを手本にしたといわれているが、次第に日本独自の昔話のありかたを他民族の基準にあてはめることで失われるものの大きさを懸念した柳田は、海外の理論の導入や採用を厳しく拒んだ（関、1981a, p.50; 関、1982b, p.154; 関、1982c, p.387）。柳田に師事し、一時は柳田の伝説研究でその整理と分類を担当していた関であったが、海外の昔話研究との比較をもって日本昔話を研究するアプローチを選択したことで柳田と袂を分かつことになった（関、1981a, p.16-17; 関、2014）。はたして関が選択した国際比較の方法論によって、日本昔話は海外の理論体系や分類軸に吸収されてしまったのだろうか。それに対する見解について民話研究者の三原幸久（1932-2013）は次のように述べている。「従来、ともすれば〔『大成』の前衛的著書である〕『日本昔話集成』がアールネ・トンプソンの『昔話の型』の強い影響下に作られたように考えられがちであるが、それは柳田國男の『日本昔話名彙』に比べてのことであって、『日本昔話集成』の分類法（特に下位分類）や命名法、昔話の中を含めるべき話型の範囲、全体の編集方法等どれをとってみても関敬吾独自の工夫がなされていない所はなく、諸外国の民族別話型索引を多く利用した経

験のある筆者などは『日本昔話集成』ほど周到な話型索引が他国にないことをよく承知している」(三原, 1980) ([] 内は筆者加筆)。後述するように、『大成』の下位項目はアールネ・トンプソンの分類(以下、AT分類)の下位項目とは大きく異なっており、関がAT分類ありきでなく、いかに収集された説話群に即してこれをまとめていったかがわかる。

また、外国の概念に自国の言葉を与えたり、自国の類似概念と同一であるのかを検証する作業は、言うまでもなく両国の言語と文化、そしてその概念自体に深く精通していなければできないことである。その点において関は大学時代にドイツ哲学を専攻してドイツの思想や語学を学んでおり、欧米の文献や昔話を原語で読んでいた。晩年にはなるがドイツのゲッティンゲン大学に客員教授として招聘され、一年半ほどドイツに住んだ経歴もあった(関, 2014)。また、民俗学者として折口信夫や柳田國男に師事し、日本の昔話を実践的に研究していたので、当時の昔話研究の最前線にあったドイツの昔話の概念群や用語をどのように自国語に翻訳するのが妥当であるかについては高い信頼性をもって判断を下すことのできた数少ない研究者だったと思われる。このような理由から、筆者は関敬吾の昔話の定義、及び昔話観に基づいて整理分類された『大成』を用いることにした。

3. 散文伝承群の総称語とその概念範囲

3-1. 民間説話

昔話、伝説、寓話といった散文伝承群を総括する言葉として、英語では *folk narrative*³⁾ (民間物語) や *prose tradition* (散文伝承)、ドイツ語では *Volksmärchen* (民間昔話) や *Volksdichtung* (散文伝承) といった語があるが、1937年にパリで開催された国際民話学会にお

いて、それらを総括する名称は *folktale* (英)、*conte populaire* (仏)、*Volkserzählung* (独) に統一された(関, 1981b, p.225; 関, 1981g, p.298)。それに対応する和名として、一般的には「民間説話(民話)」や「民譚」(関, 1981f, p.294)の語が充てられている。

1937年以前から「民間説話(民話)」や「民譚」は外国語から訳出された語として民俗学領域では多少知られた言葉であったようであるが、この国際民話学会で決定した散文伝承群の総称語(*folktale; conte populaire; Volkserzählung*)に「民間説話」の語が充てられたことについては、当時の日本の民俗学の研究者間で意見の相違があった。散文伝承の総称語を字義通りに「民間説話」と直訳した関は、それに異を唱えていた柳田、及び柳田派の民俗学者たちから批判を受けることになってしまったのだが、関からすれば「そのころはここに問題としている意味の話は昔話とよぶことを知らず、またわれわれの地方⁴⁾では昔話というのはこれとまったく違った意味に使われている」(関, 1981e, p.275)という事情があつてのことであった。しかし、関は「[民間説話、民話、民譚といった]これらの言葉は、ヨーロッパ語(*folktale; Märchen, Volksmärchen; conte populaire*)からの借用語である。昔話とほとんど同意語に使われているが、その典拠となったヨーロッパ語の間から、共通の概念をひきだすことは困難である。まして、在来の日本語の昔話とも一致するものではない。ただ、共通するところは、民衆の間に伝承された口承の物語であるということだけである」(関, 1981c, p.4) ([] 内は筆者加筆)とも述べており、散文伝承の総称語をめぐる問題意識は柳田派の意見とそうは変わらないように思える。

また、1937年の国際学会において民間説話の概念範囲は「動物昔話」「昔話」「笑話」「伝説」

と規定された(関, 1981c, pp.18-19)。ここで注意すべきは、「民間説話の下位区分に置かれた昔話」と「総称語としての昔話」(「3-2. 昔話」参照)とでは概念範囲が異なるということである。「民間説話の下位区分に置かれた昔話」は、いわゆる「本格昔話」と呼ばれるものと同義であり、「4-2. 本格昔話」にて詳述する。ちなみに、この国際的な概念区分について関は「わが国の散文伝承の実際にもむりなく適用できる」(関, 1982b, p.59)という一定の評価を下してしているので、本稿もこれに従い、日本の散文伝承群にも「動物昔話」「昔話」「笑話」「伝説」の種類があると認識することにする。

3-2. 昔話

日本において昔話という語がいつから使われるようになったのかは不明であるが、遡りうる起点としてよく引用されるのは江戸時代初期の山東京伝(1761-1816)の『骨董集』(1815(文化12)年)にある「祖父祖母の物語とあるは、むかし、ちぢとばばありけり、という発語をとりて、名目にしたるものなるべければ、童の昔ばなしは、いとふるきことなり」という記述である(関, 1982b, p.67)。口語においては「むかし」「むかしこ」「むかしがたり」、民俗学領域においては「童話」(1905(明治38)年)や「俗話」(1913(大正2)年)といった学術用語などが使われたりしていたが、民俗学的意味で「昔話」の語が用いられるようになったのは、佐々木喜善(1886-1933)が『江刺郡昔話』(1922(大正1)年)を発表したあたりのことと考えられている(関, 1982b)。さらに「昔話」が学術用語として定着したのは、柳田が『昔話解説』(1928(昭和3)年)や『日本昔話集』(1930(昭和5)年)を発刊したり、『旅と伝説』(第4年(4)(40)[55], 1931(昭和6)年)において昔話が特集された昭和初期頃といわれる(関, 1982b)。

日本昔話の概念を規定するにあたって、柳田は世界で初めて昔話を科学的に研究したグリム兄弟の学説を参考にした(関, 1981a, p.51; 関, 1982c, p.387)。特に、兄ヤーコブ Jacob Grimm (1785-1863)の「昔話は詩的であり、伝説は歴史的存在である」(関, 1980c, p.5)という観点は、日本の昔話と伝説の概念規定に影響を与えたとされる(関, 1981a, p.34)。また、昔話であるかどうかの判断基準を「むかしむかし」などに始まる発語と「めでたしめでたし」などで締めくくられる結語をもって定めようとした研究者もあったようだが、関はこれに合致しない昔話も多いこと、これらの言葉はわりとルーズに使えること、さらに『今昔物語集』(平安時代後期)における説話群が「今ハ昔」の発語と「ト語り伝ヘタルトヤ」の結語に形態が整えられていた影響の可能性を指摘し、単に発語と結語をもって昔話を規定するのではなく、内容や構造の両面からの考察が必要であるとしている(関, 1980c, p.10; 関, 1981a, p.36, p.91; 関, 1981c, p.37)。

このように何をもって昔話とするのかの基準を定めるのは容易ではないが、柳田は総称語としての昔話の概念範囲を「動物昔話」「本格昔話」「笑話」と規定した(関, 1981a, p.143; 関, 1979)。この区分方法はアールネが Märchen を「動物昔話(寓話)」「本格昔話」「笑話」の三区分に規定したことと近似しているゆえに、日本昔話の区分はアールネ説を取り入れたのではないかと、といった見解を示す研究者もいるが、関は「三区分が一致しているだけにすぎない」(関, 1982b, p.70)と断言しているので、日本昔話がAT分類ありきで整理されたのではないということは改めて押さえておきたい。

先に述べた「総称語としての民間説話」と「総称語としての昔話」の概念範囲を比べてみると、後者の概念範囲は前者のそれから伝説を除いた

ものであることがわかる。本稿ではこれに従って、民間説話と昔話との違いはその下位区分に伝説を含めるか否かと認識することとする。

3-3. Märchen

日本昔話の概念区分とアールネによる Märchen の概念区分は一致こそしているものの、両者間にはどのような違いがあるのだろうか。Märchen の語が世界的に広まったのはグリム兄弟に始まるといわれており、この語は各国においてそれぞれの国の民間伝承に相当する説話群を呼び表す語として適用された(関, 1982b, p.69)。日本で「メルヘン」の語が時に「昔話」と同義的に用いられることがあるのもこのあたりの事情による。また、1887(明治20)年⁵⁾に日本で『グリム昔話集』(原題: *Kinder- und Hausmärchen*) が初めて紹介された際、その表紙には『フェアリー・テールズ』とカタカナ表記で記されていたために Märchen のドイツ語は英語を経由して日本語に訳されたともいわれている(関, 1982b)。ここに、Märchen (独) と fairy tales (英) と昔話が同義的に扱われていることがわかる。時折、フェアリー・テールズは「妖精譚」とも呼ばれるが、果して日本の昔話は妖精譚であるのかどうか。答えは「否」であろう。ドイツ語の Märchen が口語的に表現される時、そこには不思議(Wunder)とか素晴らしい(Pracht)とか嘘(Lüge)といったニュアンスが含まれるそうだが、そうであるならば Märchen と妖精譚の間には親和性がありそうである(関, 1982b)。

語源的に見ると、mär- の語には知らせ、報告、噂という意味があることをスイスの民間伝承研究者リュートィ Lüthi, M. (1909-1991) は述べている(関, 1982b, p.99)。またポイケルト Peukert, W. (1895-1969) も、Märchen はもとは現実に起こった事件の報告であって、やがて

それが世間話となり、統合されて昔話や伝説の形になったと見ている(関, 1982b, p.113)。日本昔話ではどうか。柳田は日本民俗学を基礎づける目的で昔話研究を行ったのだが、その中心的課題は日本固有の信仰を突き止めることにあり、伝説や昔話の起源は神話にあると仮定した(関, 1980a; 関, 1982b, p.128)。この柳田の「神話先行説」は、リュートィらの説、つまり日常生活で発生した報告や噂話から Märchen が生まれたとする考えとは異なるように思われる。ただ、欧米にも神話先行説を唱える昔話研究者は多く、グリム兄弟をはじめ、ウェッセルスキー Wesselski, A. (1871-1939) やライエン Leyen, F. (1873-1966) などその立場に立っている。ので、起源から日本の昔話と Märchen との間に概念的差異を求めることはできない(関, 1982b, p.155)。

それでは、関は神話と昔話との関係をどう捉えていたのだろうか。関は「昔話の中に隠された信仰・呪術信仰の要素を発見し、昔話の発生の根拠をここに見出し、解釈する…こうしたアプローチの仕方を根本的に否定するものではないが…しばし保留」(関, 1981d, p.264) にするという態度を示している。そして、その地道なフィールドワークから浮かびあがってきた「昔話を社会慣習の反映として、とくに人間の生涯の過程、婚姻と富の獲得を主題とするものではないか」(関, 1981d, p.266) という仮説に関は取り組んでいくこととなった。

少し横道に逸れたが、日本の昔話と Märchen との関係性について本稿においては、異なる文化圏で育まれてきた両者はそれぞれにニュアンスの違いはあるが、いずれも「動物昔話」「本格昔話」「笑話」の三種に分けることのできる散文伝承群であるということを押さえるにとどめておく。

4. 『日本昔話大成』に収録された昔話

これから実際に、『大成』に収録された昔話がどのようなものであるのかを見ていくことで「昔話とは何か」について考えてみたい。『大成』は、明治末年から昭和51年末の間に、語り手から直接採集された沖縄県から青森県、及びアイヌ民族の昔話、およそ34,000話余が話型分類によって体系づけられた全12巻の書物である（関, 1979, p.11; 関, 1980c）。『大成』で報告された話型数は合計740（亜型を加えると825）である。その構成は、1巻が「動物昔話」、2～7巻が「本格昔話」、8～10巻が「笑話」と「補遺」、11巻が索引群の掲載された「資料篇」、12巻が16名の知識人たちの寄稿論文からなる「研究篇」となっている。以下に「動物昔話」「本格昔話」「笑話」の特徴を見ていくこととするが、各区分に整理された話型の内容については表1、表2、表3にそれぞれまとめたので、適宜参照されたい。

4-1. 動物昔話

行動者の全員あるいは主たる行為者が動物の説話群を動物昔話という（関, 1982b, p.59）。動物昔話の英語表記は animal tales の他、fable（寓話）とも示されるように、その説話の多くはギリシア・ローマ寓話と共通するといわれる（関, 1979）。関は、動物寓話を「動物の忠実な直観的観察によって、動物に一定の類型を与え、人間行動を動物行動にすりかえ、諷刺と道徳的・教訓的内容を与えたもの」（関, 1981a, p.22）と定義しているが、これは動物昔話の特徴として読み替えることができると思われる。本格昔話にも動物が主たる行為者として登場する説話もあるが、その場合、動物の語られ方や動物と人間の関係性は動物昔話のそれとは異なることで両者は区別される。つまり、本格昔話では動物

は言語を理解したり、変身するなど超自然的な存在として描かれる一方、動物昔話における動物は行動こそ人間的であるものの、あくまでも自然種として描かれる（関, 1982b, p.116）。

動物昔話に描かれる葛藤状況は人間社会を投影しているかのようであり、時に死傷沙汰にまで極まることもあるが、登場者が動物であり、舞台も動物世界であるからこそ、緊張が高まる状況もその牧歌的な情景の中で、聴き手はそれを教訓やジョークとして受け止めることができるように思われる。では、もし動物世界と人間世界が重なり合うとどうなるか。勝々山譚には、狸汁にしようとして狸を捕まえた爺の留守中に、縄で縛られた狸が婆を騙して縄を解かせ、婆を殺し、婆に化けて、帰って来た爺に「狸汁だ」と偽って婆汁を食べさせる、という類話がある。人間の視点から見たら非道でむごい話であるが、狸の視点から見れば狸汁になる難を逃れた狸が大敵である人間を懲らしめた英雄譚である。筆者はこの説話からは寓話的要素やほのぼのとした雰囲気を感じ取ることができないが、その要因として考えられるのは、まず動物世界と人間世界とが重なり合い過ぎていて、そして人間と狸の両視点が図地反転することで生じる物語の重層性が挙げられるだろう。

『大成』の動物昔話は11の下位区分をもって整理されている（表1）。一方、国際的に認められているAT分類において動物昔話の下位区分（class）は5つであり、それらは「野生動物」「野生動物と家畜動物」「野生動物と人間」「家畜動物」「他の動物と物」となっている。『大成』の区分名は出来事やテーマを表しているが、対するATの区分名は主行為者である動物が野性であるのか、あるいは家畜であるのかといった、動物と人間の関係に基づいた属性によって整理されている。

表1 『日本昔話大成』の動物昔話

下位項目	説明	例	話型 数
1. 動物葛藤譚	悪賢い動物が他の動物をうまく騙す、あるいは騙そうとするが失敗する説話群。結末が由来譚化することもある。	『尻尾の釣り』 『猫と鼠』	6
2. 動物分配譚	共同で盗んだものや拾ったものを分け合う、あるいは物々交換する際、悪賢い動物が不当に多く分配されるようにする説話群。	『猿と狸と兎』 『拾い物分配』	4
3. 動物競走譚	足の遅い動物が工夫して勝利する話と、動物の王の選出することを主題とした説話群。	『十二支の由来』 『雛鶴は鳥の王』	9
4. 動物競争譚	「動物競走譚」と「猿蟹合戦譚」の間をなす説話群。	『猿蟹餅競争』 『猿蟹柿合戦』	5
5. 猿蟹合戦譚	不公平な分配に仲間の動物たちが協同して仇討をする説話群。	『馬と犬と猫と鶏 の旅行』	7
6. 勝々山譚	狸にからかわれた爺が狸を懲らしめるが、狸が婆を騙し殺して爺に仕返し、悲しむ爺のために兎が狸を仇討ちする説話群。類話多数。	『勝々山』	1
7. 古屋の漏譚	人食いの虎・狼が雨の晩に爺婆が「雨漏が何より怖い」と話しているのを聞き、自分よりも恐ろしい存在のあることに逃げ出す説話群。	『古屋の漏』	1
8. 動物社会譚	動物の対立抗争まで至らない、または発展しそうな型の説話群。	『狼と狐』 『百足の使』	12
9. 小鳥前生譚	小鳥の前生を語り、その鳴声や形態や習性の由来を説く説話群。	『雀の粗忽』 『よしとく鳥』	17
10. 動物由来譚	動物の鳴き声や形態や習性などの由来を説く説話群。	『犬の脚』 『土竜と蛙』	21
11. 新話型			21
合 計			104

4-2. 本格昔話

『日本昔話事典』によると、本格昔話とは「昔話の分類上、動物昔話、笑話、形式譚などに対して用いられる用語。広義の昔話のなかで、もっとも昔話として本格的なものの謂（い）いで、この名称がある」（p.857）と定義されている。ここに示された「昔話として本格的なもの」とは一体どのような説話だろうか。柳田は、昔話とは本来的には偉大な人物の一生を物語るものと考えていたが、関はそれとは対照的に、ごく平凡な民衆が人生で経験するようなライフイベントや、誕生、成人、婚姻といった通過儀礼が反映されているものと見ていた（関, 1980c, p.108, p.151; 関, 1981a, p.53, p.177; 関, 1982a, p.3; 小松, 1982）。

『大成』において関が行った本格昔話の整理は後述のAT分類のような大区分を設けずになされており、ただ話型群のまとまりを帰納的に命名する程度に留められているようにも見受けられる（表2）。門外漢の筆者が本格昔話に共通する特徴などを述べることはできないが、この区分名から筆者が受けた印象を述べさせていただくとすれば、それは誕生や婚姻といった人生の節目、運命や呪宝や異界訪問といった人生に否応なく生じる個別的かつ運命的な出来事、近しいゆえに緊張感や葛藤を伴う関係性の難しさなど、人が生きていく上で普遍的に生じる事象を軸にまとまりが形成されているように思われる。そしてそれは、当然のことながら上述の関の本格昔話観ともつながるものである。

表2 『日本昔話大成』の本格昔話

下位項目	説明	話型	
		例	数
1. 婚姻 異類聳譚	人間以外の者との不思議な婚姻をテーマとする異類婚姻のうち、夫となる者が異類である婚姻の説話群。	『蚕神と馬』 『猿聳入』	9
2. 婚姻 異類女房譚	人間以外の者との不思議な婚姻をテーマとする異類婚姻のうち、妻となる者が異類である婚姻の説話群。	『鶴女房』 『天人女房』	10
3. 婚姻 難題聳譚	男が難題を解決して長者の娘や美人の嫁を得る説話群。	『娘の助言』 『播磨糸長』	14
4. 誕生譚	主人公の異常な誕生から始まる一代記風の説話群。	『一寸法師』 『竹姫』	15
5. 運命と致富譚	超自然的な力で人間の運命が決定されることを主題とした説話群。	『産神問答』 『夢買長者』	15
6. 呪宝譚	手にした呪宝によって幸福になったり、欲深な隣人がそれを真似て失敗する説話群。	『聴耳』 『生鞭死鞭』	9
7. 兄弟譚	兄弟姉妹の葛藤関係や協力関係を主題とした説話群。	『龍神と釣縄』 『三人兄弟』	11
8. 隣の爺譚	福を手にした正直な爺と、それを真似て失敗する欲深な爺の説話群。	『花咲爺』 『瘤取爺』	13
9. 大歳の客譚	貧しい者が、困っている者を助けることで福が訪れる説話群。	『笠地藏』 『貧乏神』	8
10. 継子譚	継母と継子との葛藤や対立を主題とした説話群。	『手無し娘』 『米福粟福』	18
11. 異郷譚	海底世界と関係する説話群。	『浦島太郎』 『黄金の斧』	5
12. 動物報恩譚	動物の恩返しを主題とした説話群。	『文福茶釜』 『忠義な犬』	12
13. 逃竄譚	鬼や山姥の家から無事に逃げ帰る説話群。	『三枚の護符』 『食わず女房』	12
14. 愚かな動物譚	動物あるいは化物対人間の葛藤が人間の勝利によって終結する説話群。	『鍛冶屋の婆』 『化物問答』	18
15. 人と狐譚	狐の説話群。海外で見られる狐の説話との内容的一致は少ない。	『狐の嫁取』	18
16. 新話型			46
合計			233

AT分類では「魔術譚」「宗教譚」「現実譚」「愚かな悪魔」の4つの大区分が本格昔話に相当し、ここからさらにそれぞれの下位区分が設けられている。このうちの魔術譚こそが本当の意味での Märchen とみなすドイツ人研究者も少なく、関もその立場に立っているので、ここでは魔術譚の下位区分を取り上げてみることにす

る（関, 1981a, p.177; 関, 1982b, p.71）。魔術譚の下位区分は「超自然的反対者」「超自然的夫(妻)」「超自然的課題」「超自然的援助者」「呪宝」「超自然的能力」「その他の超自然的な話」であり、説話の区分決定においては「超自然的」な対象や事象が描かれているどうかはその判断軸となっていることがわかる。魔術譚を本当の意

味での Märchen と見なす研究者たちの見解は、前述した Märchen の醸す不思議さ、素晴らしさ、嘘といったニュアンスと、魔術譚に特徴的な超自然性との響き合いに関係しているのかもしれない。また、魔術譚の本質的テーマは呪縛とそこからの解放とも、配偶者の獲得ともいわれているが、その視点から見れば柳田の英雄一代記としての本格昔話観や、関のライフイベント及び通過儀礼としての本格昔話観とも親和性がありそうである（関, 1982b, p.102, p.116）。

宗教譚とは、伝説モチーフや伝説形式の昔話で、神や悪魔に親和性のある説話群である。現実譚とは、魔術譚の超自然的要素が欠落した伝奇的物語とされる。愚かな悪魔とは、人間と化物との間に見られる葛藤や、化物の愚行をテーマとした説話群である。紙数の関係上、宗教譚以下の下位区分については割愛するが、AT分類では『大成』にはないこの4つの大区分を上位概念として設けていることに着目しておきたい。筆者はAT分類に収録された昔話のすべてを読んでいないので、AT分類に整理された説話群の特徴について言及することはできないが、このAT分類の大区分を見る限り、説話に描かれる事象や登場者が現実的であるかどうかで区分決定における一つの判断基準となっているようである。もし説話が現実的でない場合、それは宗教で説明できるのか、あるいは何か超自然的な事柄を想定すれば説明可能なのか、または悪魔や化物の存在を仮定することで説明しうるものなのか。人智を越えた現象をどのような視点をもって認識しようとしているのか、という精神構造の特徴を昔話の区分を通して垣間見ているかのようで興味深い。

4-3. 笑話

笑話とは笑いを目的とした愚か者の愚行に関する話である。その愚行の原因は登場者の行為

の失敗によるものであり、説話の題材は社会の底辺層で起きる日常事件である（関, 1982b, p.101）。本格昔話にも笑いの要素が描かれることがあるが、結末において登場人物の失敗が教訓的に示される場合が多く、またその失敗の原因も主人公の運や能力といった本人の意思の及ばない先天的な授かりものの欠陥であることから笑話とは区別される。また妖怪や半神といった超自然的存在に関しても、笑話においては愚か者として登場する傾向がある一方、本格昔話においては畏怖すべき存在として現れるという点で両者は対照的である（関, 1981c, pp.24-26）。

AT分類において笑話は7つの下位区分、つまり「愚か者の話」「愚かな夫婦」「愚かな女房(娘)」「愚かな男」「聖職者や聖人の笑話」「その他の部類の人々についての話」「法螺話」のもとに整理されている。区分名を見る限り『大成』の下位区分と親和性があり、またどちらも「愚かさ」が笑いに関係していることがわかる（表3）。

説話の内容を見ると、『大成』には狡猾さや悪賢さによって相手を出し抜く類の笑話も多い。当事者にしてみたら到底笑話にはならないような葛藤状況であるが、笑話という枠組や登場者のキャラクター化といった、聴き手が心的距離を置いて説話を眺められるような工夫によって、笑いへとつなげられているかのように思われる。哲学者のベルグソン Bergson, H. (1859-1941) は笑いの生じる条件の一つに観客の無感動を挙げている。これは、もし登場者への憐みや共感などが生じてしまったら、笑えるものも笑えなくなってしまうことを指摘するものであり、上記の心的距離と笑いとの関係とも響き合う。

またベルグソンは、しなやかに変化し続ける生命的なものに対して人が機械的な自動現象を

表3 『日本昔話大成』の笑話

下位項目	説明	話型	
		例	数
1. 愚人譚	特定の地名と結びついた笑話。無知や勘違いによる愚行が題材となっ	『手水を回せ』	29
A. 愚か村	たものが多い。	『旅学問』	
B. 愚か聾	男が世間で笑い者にならないように、母や嫁が助言しようとする笑話。	『買い物の名』	34
		『法事の使』	
C. 愚か嫁	女（嫁）が主人公の笑話。嫁入りに際しての注意事項を愚直に守ることがかえって裏目に出る話や、性的モチーフの頓智など。『日本昔話大成』では、この区分に不適切な説話も分類されているとされる。	『猫のように』	39
		『唾嫁』	
D. 愚かな男	日常生活における行為（聞き間違い、長々しい丁寧語など）や性格（性急さ、無精、癖、短気など）による愚行をテーマとした笑話。怪談のような説話もある。	『四の字嫌い』	54
		『とろかし草』	
2. 誇張譚	誇張と法螺話。ミュンヒハウゼン物語*と一致する説話も見られる。	『鴨取権兵衛』	14
		『鼻高扇』	
3. 巧智譚		『法螺較べ』	38
A. 業較べ	わざ（業・技）比べをテーマとした笑話。	『無言較べ』	
B. 和尚と小僧	謎昔話**、及び頓智をテーマとした笑話。	『親棄山』	27
		『飴は毒』	
4. 狡猾者譚		『榮螺を買う』	65
A. おどけ者	吉四六***の話に類する笑話。	『蚤は業』	
B. 狡猾者	狡猾者を主人公にした笑話。	『金ひり小犬』	11
		『馬の皮占』	
5. 形式譚	話の内容よりも語り方に特徴のある説話群。累積譚、連鎖譚、尻切れ話、果てなし話、からかい話などがある。	『短い話』	8
		『長い名の子』	
6. 新話型			26
		合計	345
補遺			38

* ミュンヒハウゼン Münchhausen, H. (1720-1797) は狩猟と大話の得意な実在のドイツの地方貴族である。「ほらふき男爵」の異名でも知られた彼をモデルに書かれた奇想天外な冒険話や法螺話をミュンヒハウゼン物語という。

** アールネは本格昔話に分類している。

*** 江戸時代初期に豊後国に実在した庄屋の廣田吉右衛門がモデルとされている。

伴ったぎこちなさを呈する時、私たちはそこに滑稽さを感じ、そのぎこちなさに対して矯正を働きかけるものとして笑いが機能していると考察している (Bergson, 1900)。このような視点で笑話を見た時、笑いとは紙一重で存在する社会的葛藤や、その社会において暗に矯正が求められていたものが何であったのかが見えてくるかもしれない。

5. 考察

私たちの心の理解に昔話の視点をを用いることができるのだとしたら、心と昔話とはどのような関係にあるのだろうか。現段階で筆者の思うところを述べてみたい。

昔話研究史においては、「昔話とは何か」を探ろうとする試みとして昔話を構成要素に細分

化してその本質に迫ろうとするもの、その反対に形態全体を見ようとするもの、昔話の機能的側面からそれを知ろうとするものなど、多様なアプローチで取り組まれてきたことは「2. 方法」で述べた通りだが、心理学史においても「心とは何か」を探ろうとした際に同様のアプローチが見られたことはここで言及するまでもない。同じようなアプローチで昔話と心が研究された理由を、科学的研究における方法論上の重なりで説明することも可能であろうが、単にそれだけのことなのだろうか。たとえば昔話研究における「話型」と、深層心理学的研究における「元型」という研究アプローチは、両者ともに「型(タイプ)」という概念を仮定したものであるが、これは昔話と心の間には特性上の類似⁶⁾があるゆえの方法論上の重なりと考えることはできないだろうか。もちろん昔話は心が生み出したものであるから、そもそも両者は分かちがたい関係にある。しかし、互いをモデルとしながら両者間の異同を明らかにしていくことで、それぞれの特性への理解を深めることも可能と思われる。筆者が昔話を取り上げ、その研究史に及んでまとめているのも、この類推によって「心とは何か」を探ろうとしているからに他ならない。

「話型」と「元型」の関係を検討するにあたり、昔話と心の共通点である可変性と不変(普遍)性について述べてみたい。昔話は本来語られるものであり、その語りは一回性のものである。文言が一語一句違わずに再現されることは語りの場では求められていないし、聴き手の属性や語りの文脈、語り手自身の記憶などの要因によって語りの内容や登場者の属性などが変わってくることもある。それでもなお、昔話に内包されたメッセージは失われることなく、世代を越えて語り継がれていくような普遍性が昔話にはある。一方、心にも可変的側面と不変(普遍)的側面がある。たとえば、現実に適応していく

ためには状況に合わせた流動的な対応をしなければならないが、この時に発揮されているのが心の可変的な機能である。しかし、めまぐるしい変化の中にありながらも意思や個性といった個人の一貫性を持続させるものが私たちの心の中にはある。このように変化しつつも変わらないという二重の側面を昔話と心は持ち合わせている。「型」という概念を使用するに至ったそれぞれの理論的背景は異なるにせよ、変化しつつも不変(普遍)的な構成要素とは何かを求める志向性が話型という方法論であり、また元型論であったと筆者は考える。それぞれの理論的背景や展開を論じるのは別の機会に譲るとして、ひとまず本稿においては「型」という概念を用いて不変(普遍)的な層を抽出しようとする研究アプローチの重なりが、昔話と心の特性上の類似を示唆するものであることを現段階の仮説として述べておきたい。

6. おわりに

万象が分類され、計測可能なものへと整えられた科学的世界観と、空想とも現実ともわからぬようなことを一回性の語りの中で体験させる昔話的世界観とでは物事の捉え方が大きく異なるが、私たちの心のありようを説明するにあたっては昔話的世界観を用いた方がわかりやすい場合がある。もしかすると事物の境界があいまいであることが功を奏しているのかもしれないし、さらには心と昔話とを分けすぎることなく、同義的に重ね合わせられるからこそ賦活されるイメージもあるのかもしれない。筆者の行っている概念境界の明確化は昔話を心性理解に活かすことが目的ではあるが、この方法論自体が昔話の世界観を分節化させ、結果的にはその世界観を破壊してしまうことにつながるのかもしれない。光をあてることで失われてしまう

可能性を思いながら、「明確」と「曖昧」の間の落ち着きどころを模索するように、この研究を進めているのが実情である。

文化差を越えて種内に存在する心の表現方法は昔話以外にも多く存在し、芸術はその好例である。「芸術とは何か」という問いに対するベルグソンの論考が「昔話とは何か」とも響き合うので紹介したい。ベルグソン曰く、芸術の目的とは「実用に役立つ記号の群れや慣習的社会的に受容されている一般観念、すなわち実在をわたしたちに隠している一切のものを取り除き、わたしたちを実在そのものに直面させる以外のものではない」(Bergson, 1900, p.130)。そして、自然の事物から内的生命を垣間見た芸術家、あるいは芸術作品からそれを垣間見ることのできた者が、他者にも同じ体験をさせようとして「言葉を律動的に配列し、有機的に組み合わせ、そこにオリジナルないのちを誕生させることにより、言語の表現できない事物を語る、というよりもむしろ暗示する」(Bergson, 1900, p.129)のである。ここに示された芸術のなそうとしていることこそが、昔話という一回性の語りの芸術がなそうとしていることを表しているのではないだろうか、と筆者は考える。

註

- 1) ゴンム Gomme, G. 著の『フォークロア手帳』(*Handbook of Folklore*) (1890) には Baring-Gould により分類された 77 の話型が紹介されている (関, 1981a, p.66; 宮廻, 1992)。
- 2) 柳田 (1969) は、日本の昔話採集が「グリム兄弟のそれよりも丸一世紀遅れて」(p.493) いると見ているが、それは 1812 年に出版された『グリム昔話集』(初版第 1 巻) と 1916 年に出版された高木敏雄の『童話研究』(1916) を指してのことと思われる (関, 1981b)。
- 3) 『ブリティッシュ民話辞典』(*Dictionary of British Folktales*) (Briggs, 1970) では、folktales を folk narratives (民間物語) と folk legends (民

間伝説) に区分しており、さらにそこからそれぞれ下位区分がある (関, 1982b, p.75)。

- 4) 関敬吾の出生地である長崎県小浜村 (現・小浜町) のことと思われる。
- 5) 1870 (明治 20) 年に発表された『グリム昔話集』の翻訳本とは管了法 (1857 - 1936) が翻訳した『西洋古事神仙叢話』であるが、この「神仙」の語が英語の「フェアリー」に対応しているのかもしれない。
- 6) 昔話研究における話型あるいはモチーフに対応可能性のある深層心理学的概念としては、元型よりもむしろ「元型的イメージ」がそれに近いと思われる。

引用・参考文献

- Bergson, H. (1900). *Le Rire*. Paris: Felix Alcan. (原章二 (訳) (2016). 笑い／不気味なもの 平凡社ライブラリー pp.9-203)
- 福田晃 (1977). 「本格昔話」. 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久 (編). 日本昔話事典 弘文堂 pp.857-859.
- Jung, C.G. (1946). *Theoretische Überlegungen zum Wesen des Psychischen*. (林道義 (訳) (1999). 元型論〈増補改訂版〉 紀伊国屋書店 pp.289-368)
- 小松和彦 (1982). 解説 関敬吾著作集第 2 巻 昔話の歴史 同朋社 pp.341-356.
- 三原幸久 (1980). 解説 関敬吾著作集第 4 巻 日本昔話の比較研究 同朋社 pp.311-323.
- 宮廻和夫 (1992). ロシア昔話の話型目録編集をめぐって スラヴ研究 (北海道大学), 39, 223-246.
- 関敬吾 (1979). 動物昔話の序 日本昔話大成第 1 巻 動物昔話 角川書店 pp.1-11.
- 関敬吾 (1980a). 笑話の序 日本昔話大成第 8 巻 笑話一角川書店 pp.1-8.
- 関敬吾 (1980b). 『集成』から『大成』へ一跋文にかえて一 日本昔話大成第 11 巻 資料篇 角川書店 pp.392-393.
- 関敬吾 (1980c). 日本昔話の社会性に関する研究 関敬吾著作集第 1 巻 昔話の社会性 同朋社 pp.3-206.
- 関敬吾 (1981a). 昔話の分類 関敬吾著作集第 3 巻 昔話研究法と伝説 同朋社 pp.3-216.
- 関敬吾 (1981b). 伝説研究 関敬吾著作集第 3 巻 昔話研究法と伝説 同朋社 pp.219-277.
- 関敬吾 (1981c). 民話 I 関敬吾著作集第 5 巻 昔話の構

- 造 同朋社 pp.3-140.
- 関敬吾 (1981d). 民話 II 関敬吾著作集第 5 卷 昔話の構造 同朋社 pp.141-270.
- 関敬吾 (1981e). 東西の昔話観 関敬吾著作集第 5 卷 昔話の構造 同朋社 pp.273-287.
- 関敬吾 (1981f). 民話 III 関敬吾著作集第 5 卷 昔話の構造 同朋社 pp.294-297.
- 関敬吾 (1981g). 民話 IV 関敬吾著作集第 5 卷 昔話の構造 同朋社 pp.298-305.
- 関敬吾 (1982a). 昔話の歴史 関敬吾著作集第 2 卷 昔話の歴史 同朋社 pp.3-288.
- 関敬吾 (1982b). 比較研究序説 関敬吾著作集第 6 卷 比較研究序説 同朋社 pp.3-362.
- 関敬吾 (1982c). 民俗学的昔話研究の課題—昔話の調査と昔話の生物学— 関敬吾著作集第 6 卷 比較研究序説 同朋社 pp.386-404.
- 関信夫 (2014). 父関敬吾のこと 石井正己 (編) 国際化時代を視野に入れた説話と教科書に関する歴史的研究 平成 25 年度広域科学教科教育学研究経費報告書, 65-68.
- 柳田國男 (1968). 昔話覚書 定本柳田國男集第 6 卷 筑摩書房 pp.329-508.
- 柳田國男 (1969). 昔話のこと 定本柳田國男集第 8 卷 筑摩書房 pp.493-501.

Abstract

The Definition and Classification of Japanese Old Tales

Waka SHIBATA

In an attempt to understand the human mind, analytical psychologists sometimes use the perspective of a fairytale. This approach is based on C.G.Jung's theory on the collective unconscious, which considers a fairytale as an expression of the collective unconscious process. A fairytale tends to be routinely referenced without mentioning its definition, classification, and conceptual boundaries among other similar prose traditions. However, it is significant to grasp what a fairytale (or a folktale, in a broader sense) actually is, especially if using it as a tool to understand psychological phenomena for the purpose of consolidating the foundation of this study approach.

The grand design of this study is to utilize Japanese old tales, *Mukashibanashi*, with an aim to promote deeper understanding of the Japanese psyche, as well as to search for culturally practical tips for interpersonal dilemmas rooted in Japan. As its basic research, this paper tries to grasp *Mukashibanashi* by outlining the classification of a folktale that has been developed in folklore studies. Along with the theoretical definition and classification, this paper overviews *Nihon Mukashibanashi Taisei*, a collection of 34,000 Japanese old tales (740 types), edited by Keigo Seki (1899-1990), to see what kind of Japanese old tales this collection covered and how these tales were organized with a brief comparison of Aarne-Thompson classification system.

Keywords: *Mukashibanashi*, definition of folktale, analytical psychology